

赤坂天王山1号墳と赤坂天王山古墳群との関係について（覚書）

丹羽 恵二

1. はじめに

桜井市大字倉橋字赤坂に所在する赤坂天王山1号墳は、古くから研究者の間で崇峻天皇陵と考えられてきた古墳である。日本書紀では崇峻天皇は蘇我馬子の手先に暗殺され、即日「倉梯岡陵」に葬られたと記されている。臣下に暗殺された日本書紀の本文中に明記された唯一の天皇である。現在、同じ大字倉橋字観音堂にある円丘状の高まりが崇峻陵として宮内庁により治定されているが、これを「倉梯岡陵」とするのは問題も多い⁽¹⁾。1辺50mの大型方墳で、石室全長15m、玄室床面が20㎡を超える規模は、奈良盆地内で屈指のもので、天皇陵にふさわしく、倉橋の地に同規模の古墳がみられないことから、1号墳が崇峻天皇の陵である蓋然性は高いと筆者も考えている。

赤坂天王山1号墳およびその周囲に築かれた古墳群については、古くから注目されており測量調査がおこなわれてきた（佐藤1914、田村1935、梅原1938など）。しかしながら、これらは現代の水準からみれば粗いもので、古墳群の詳細な検討までは至っていない。近年、橋本輝彦により詳細な地形測量と総合的な検討が試みられ（橋本2018）、1号墳をはじめそれを含めた赤坂天王山古墳群の検討を進める材料がそろってきた。筆者もこの詳細な測量図や現地観察をもとに所見を記した（丹羽

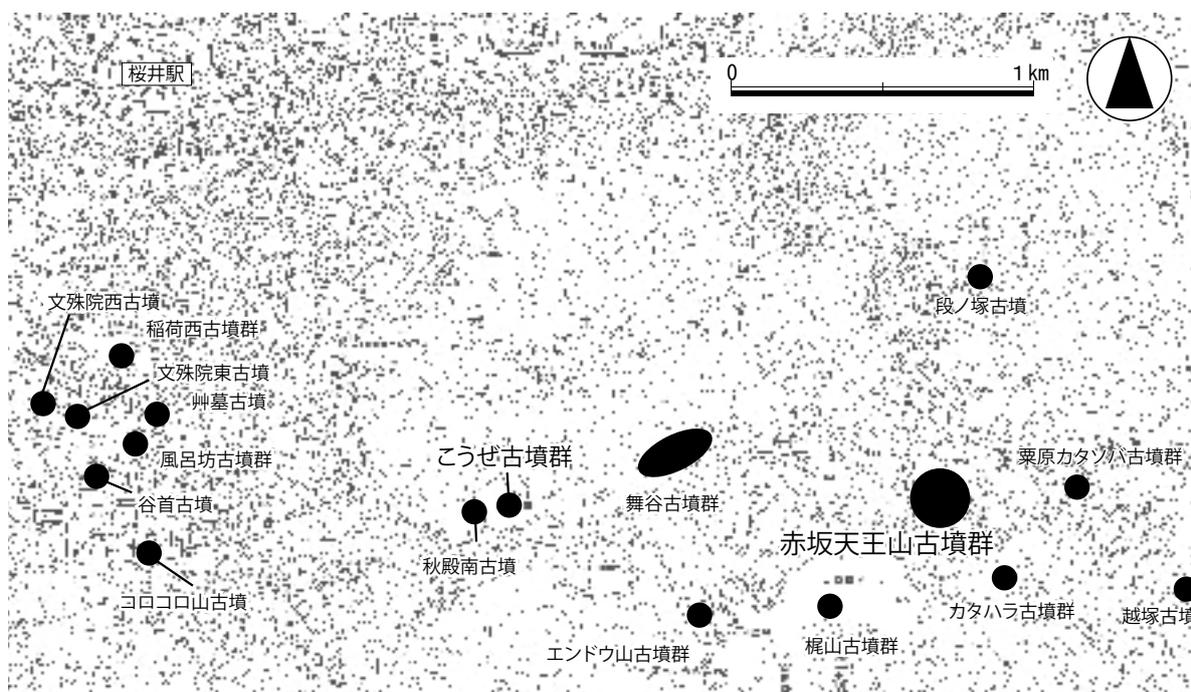


図1 赤坂天王山古墳群周辺の主な後期古墳 (S = 1/25,000)

2010) が、展示図録という性格であったためその意を十分に示したとはいえない。

被葬者が崇峻天皇であるかどうかにかかわらず、1号墳は前方後円墳の築造終焉後に築かれた初期の大型方墳であると評価でき、その1号墳と近接して築かれた古墳との関係性を検討することは、少なからず意義があることだと考え、赤坂天王山古墳群の測量成果をもとに私見を述べたいと思う。

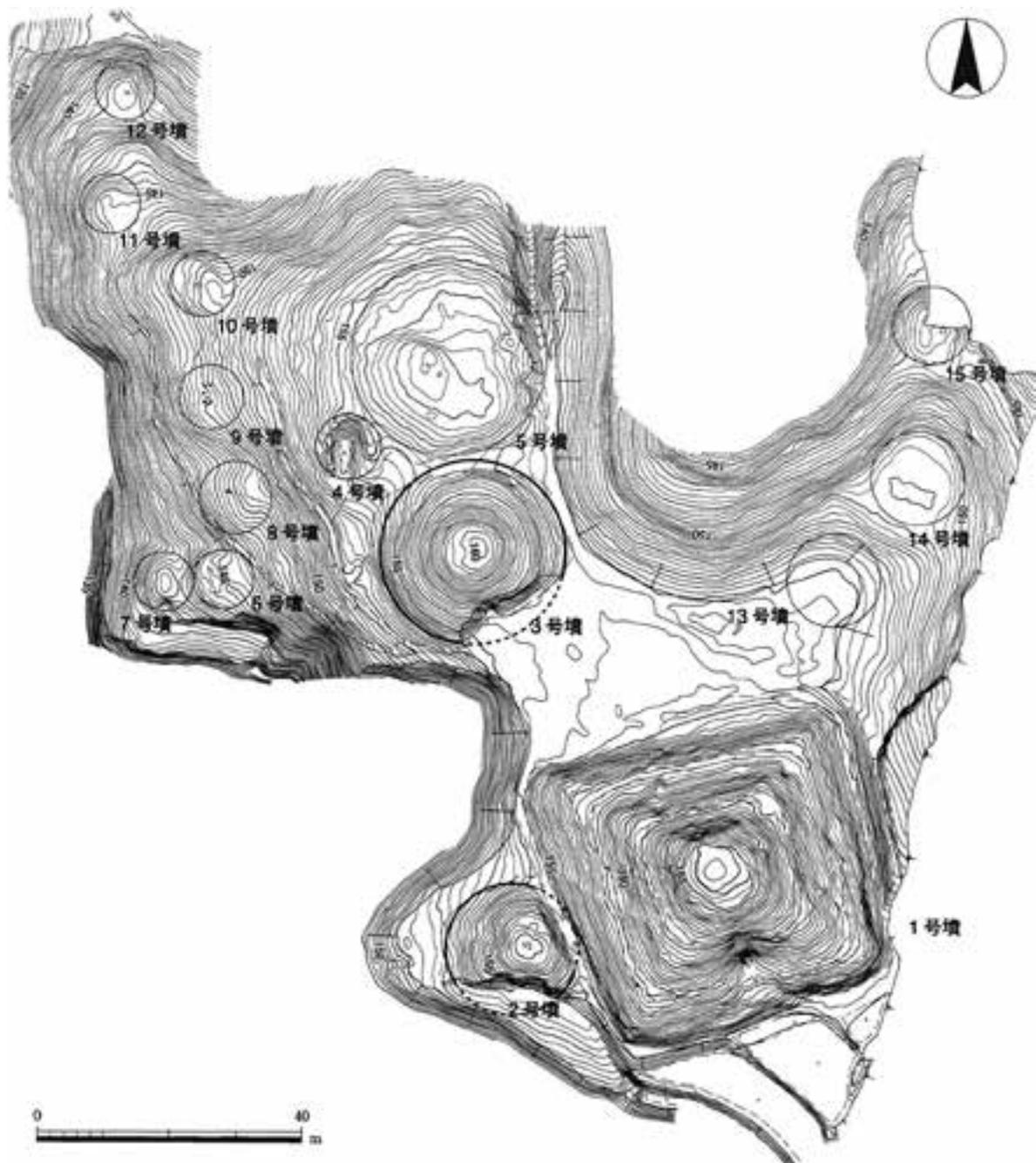


図2 赤坂天王山古墳群墳丘測量図 (S = 1/1,000、橋本 2018 から 2・3号墳の復元線を加筆)

表1 赤坂天王山古墳群墳丘規模等一覧（橋本2018から転載）

古墳名	墳形	所在地	規模(m)	埋葬施設	備考
1号墳	方墳	尾根中央	約50.5×約43.2	横穴式石室	両袖式の石室・家形石棺
2号墳	円墳	尾根中央	約25×約20	横穴式石室	右肩袖式の石室
3号墳	円墳	西尾根中央	約30×約28	横穴式石室	両袖式の石室
4号墳	円墳	西尾根中央	約10	横穴式石室?	石材の抜取りにより大きく破壊
5号墳	円墳	西尾根中央	約30	不明	
6号墳	円墳	西尾根西斜面	約9	不明	石材の散布あり
7号墳	円墳	西尾根西斜面	約10×約8	横穴式石室	両袖式の石室
8号墳	円墳	西尾根西斜面	約11	不明	石材の散布あり
9号墳	円墳	西尾根西斜面	約10	不明	石材の散布あり
10号墳	円墳	西尾根中央	約11	不明	石材の散布あり
11号墳	円墳	西尾根中央	約8	不明	周辺より須恵器環蓋の採集あり
12号墳	円墳	西尾根中央	約6	不明	
13号墳	円墳?	東尾根中央	約14	不明	古墳ではない可能性も高い
14号墳	円墳	東尾根中央	約22×約20	不明	
15号墳	円墳	東尾根中央	約11	不明	

2. 赤坂天王山古墳群の構成

(1) 立地からみた古墳群の構成

赤坂天王山古墳群は15基⁽²⁾からなる(図2・表1)。そのうち横穴式石室を主体部にもつと明らかなのは1～3、7号墳で、石材の抜き取り痕や散乱がみられることから4・6・8～10号墳も石室の可能性はある。墳形および規模をみると、やはり1号墳の存在が際立つ。1号墳は50m級の大型方墳で、3段築成であるが標高の低い南側と東側にはさらに一段分の基壇がつく(図3)ことが測量図から想定できる(橋本2018)。その他では、墳形を決めがたい13～15号墳を除くとすべて円墳である。3・5号墳は直径30m級、2号墳は20m級でやや大きく、その他は10m級と小規模な古墳となる。規模が大きなのが尾根上に築かれるのに対して、小規模な6～10号墳は斜面上に築かれ立地がやや異なる。また、尾根上にあっても低墳丘で小規模な13・14号墳は、他と比べて特徴的である。

これらの点や立地から、(A) 1・2号墳、(B) 3～5号墳、(C) 6～12号墳、(D) 13～15号墳と大きく4つのグループから構成される古墳群と理解できる。大型古墳と円墳の組み合わせであるグループA、同規模の3・5号墳と小規模な4号墳の組み合わせのグループB、斜面上に築かれ小規模な古墳のグループC、低墳丘のグループDとそれぞれが違う特徴をもったグループから古墳群は形

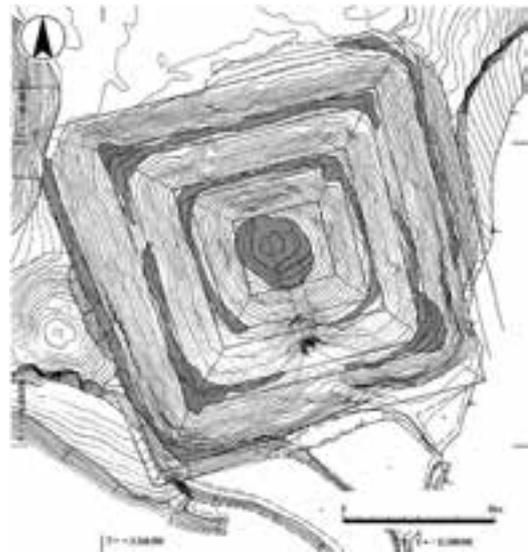


図3 赤坂天王山1号墳墳丘復元図
(S = 1/1,000、橋本2018から転載)

成されている。

(2) 墳丘測量図からみた特徴

墳丘測量図から1号墳と他の古墳との関係を考えてみたい。特徴的な場所は2点ある。1点目は、1号墳の背後(北側)にある平坦面と3号墳との関係である。この平坦面は、グループAとBを約20m隔てる空閑地となっており、古墳群の中で古墳間の距離が一番ある箇所になる。特徴的なのは開口している3号墳石室の床面(標高153m)が、墳丘の前面にある平坦面から(標高154.4m付近)、1mほど低いことである。通常であれば石室は、古墳基底部と同じ、もしくは高い位置に開口するため、

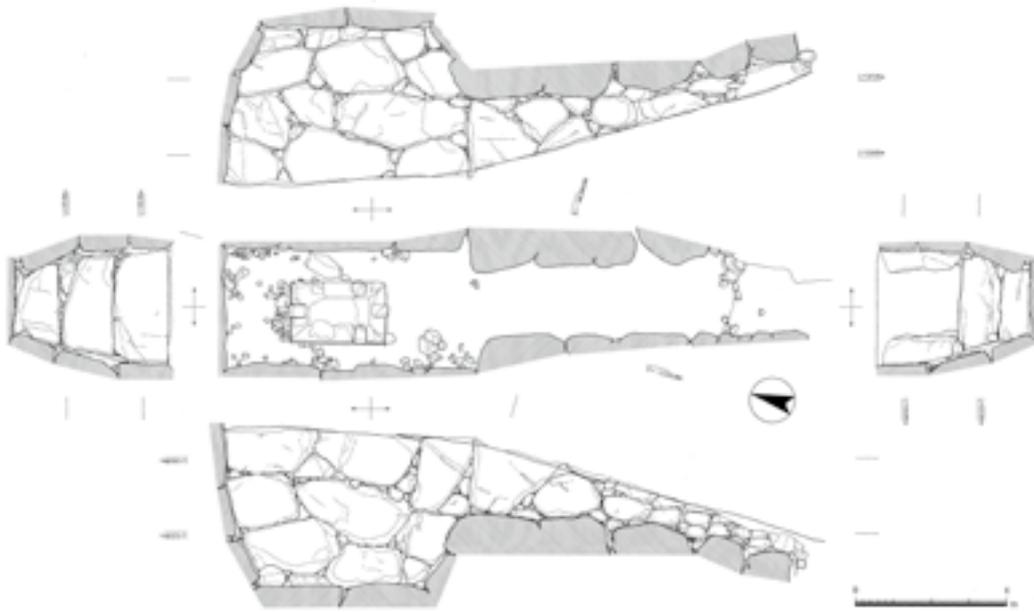


図4 赤坂天王山1号墳横穴式石室 (S=1/200、橋本2018から転載一部改変)

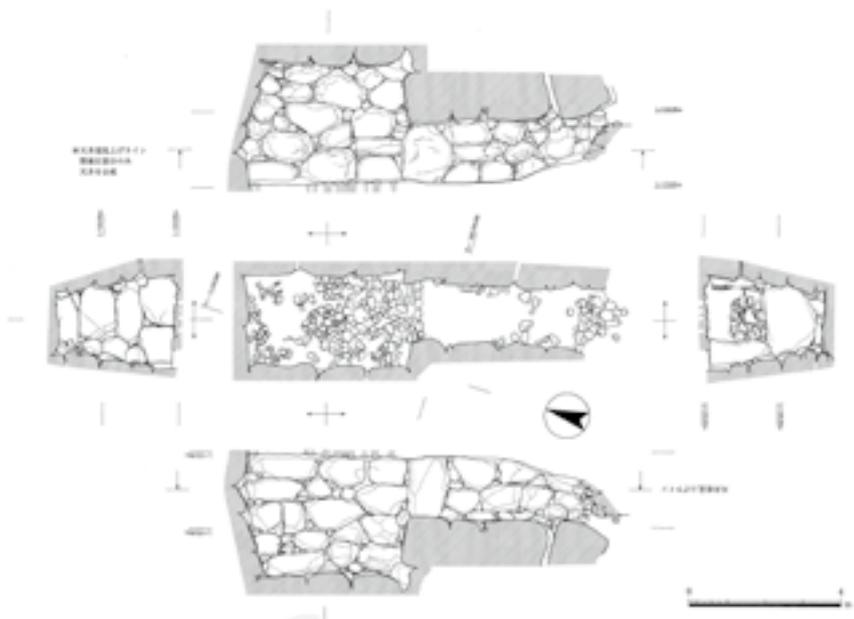


図5 赤坂天王山3号墳横穴式石室 (S=1/200、橋本2018から転載一部改変)

違和感を覚える。3号墳の墳丘は、北側や西側の等高線を参考にすると28～30mの円墳に復元でき、想定される墳丘復元ラインは図2のようになる。現状をみても3号墳墳丘の南側の一部が削平されていることが明白なのでこの復元ラインの蓋然性は高い。また、南側の墳裾は、先述したように3号墳石室床面と同じ標高153m付近を考えるのが自然で、西裾の標高が152.5m付近であることから南裾の標高の想定は妥当といえる。本来の3号墳南側の墳裾は平坦面の標高よりも低い、つまり平坦面の中に埋もれている結果になる。これより、平坦面は、3号墳築造後に盛土により造成されたといえることができる。ちなみに1号墳とこの平坦面の関係は違和感がなく、平坦面を造成するために1号墳の墳丘北側に手を加えた形跡は観察できない。

もう1点は1号墳と2号墳の間の箇所である。2号墳の墳丘を復元すれば1号墳と墳裾が重複するが（図2）、現在は1・2号墳間には幅2mほどの細い空地（道）があり、墳裾は重複していない。この空地が、後世に道として造られたものだとしても、1号墳墳丘の西斜面の等高線は直線的で乱れがみられないことから、1号墳西側は築造後に手を加えられていないと想定され、1号墳西側の墳裾を反映しているものとみえる。これらが正しければ、2号墳が1号墳に造り付いたものでなく、既存の2号墳を削り1号墳を築造したことになり、2号墳は1号墳に先行して築造されたといえる。

以上の2点から、ここでは2・3号墳は1号墳に先行して築造された可能性があり、かつそれぞれの墳丘の一部を破壊して1号墳が築造された可能性を指摘できる。

3. 赤坂天王山古墳群の横穴式石室の検討

（1）赤坂天王山古墳群の横穴式石室

ここでは古墳群の横穴式石室を検討する。横穴式石室が開口しているのは1・2・3・7号墳である。2・7号墳は大半が土砂に埋もれているため石室構造の検討はできないが、2号墳の石室は全長9.3m、玄室は長さ約4.4m、幅1.8m、羨道幅1.7mの右片袖式との記録が残されている（小島1958）。7号墳は現在も開口しており、全長4m、玄室の長さ約2.8mの小規模な両袖式石室だといえることはわかっている。1・3号墳の石室は石室構造が観察できるので以下に検討する（図4・5）。

1号墳の横穴式石室は、全長15.3m以上、玄室長は6.5m、幅3.2m、羨道幅1.8mと当古墳群のみならず奈良盆地においても最大級の規模である。奥壁、玄室側壁とも3段積みが基本で、羨道部の大部分が埋没しているが、石材は大型化しており、玄室寄りの箇所では2段積みにも見える⁽³⁾。広

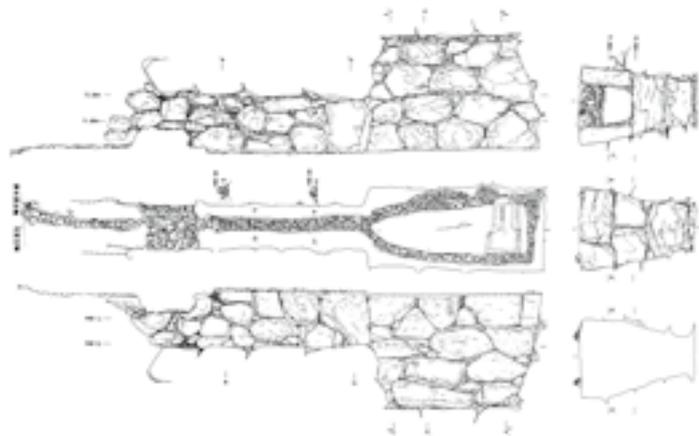


図6 牧野古墳石室実測図
(S = 1/300、河上1987から転載一部改変)

陵町牧野古墳（図6）と同規格で築造されたことはすでに多くの研究者により指摘されているとおりである。このことは測量調査報告（橋本 2018）においても追認され、異論を挟む余地はない。編年研究においても白石太一郎により、「石舞台式」の前に位置づけられる「天王山式」の標識の石室とされており（白石 1962）、この考え方はその後の石室編年研究においても踏襲する研究者は多い。1号墳の出土資料は知られていないが、同規格の牧野古墳の出土遺物を参考に TK209 型式期のもので、実年代は6世紀末頃の築造とすることも大方の賛同が得られており、筆者も同じ考えをもつ⁽⁴⁾。

一方、3号墳の横穴式石室は古くから開口していたもののその構造についてはあまり言及されていない。規模は、全長9.4 m以上、玄室は長さ約4.2 m、幅は奥壁部で2.3 m、玄門付近で2.5m、羨道幅1.5～1.7 mである。両袖部には細長の石材を縦位に置く立石の構造で、前壁天井を直接受けている。両袖式であるが右袖が幅0.65 mに対し、左袖が幅0.25 mと偏り、平面形では、右片袖式に近くみえるのは特徴的である。石材の段数は、奥壁で4段、玄室が4～5段積み基本としているが、横目地は右側壁の方が比較的よく通る。羨道側壁は、右側が同じ規模の石材を2段積みで天井石との間に小石材を1段分積み、左側は同大の石材を3段積んでいる。

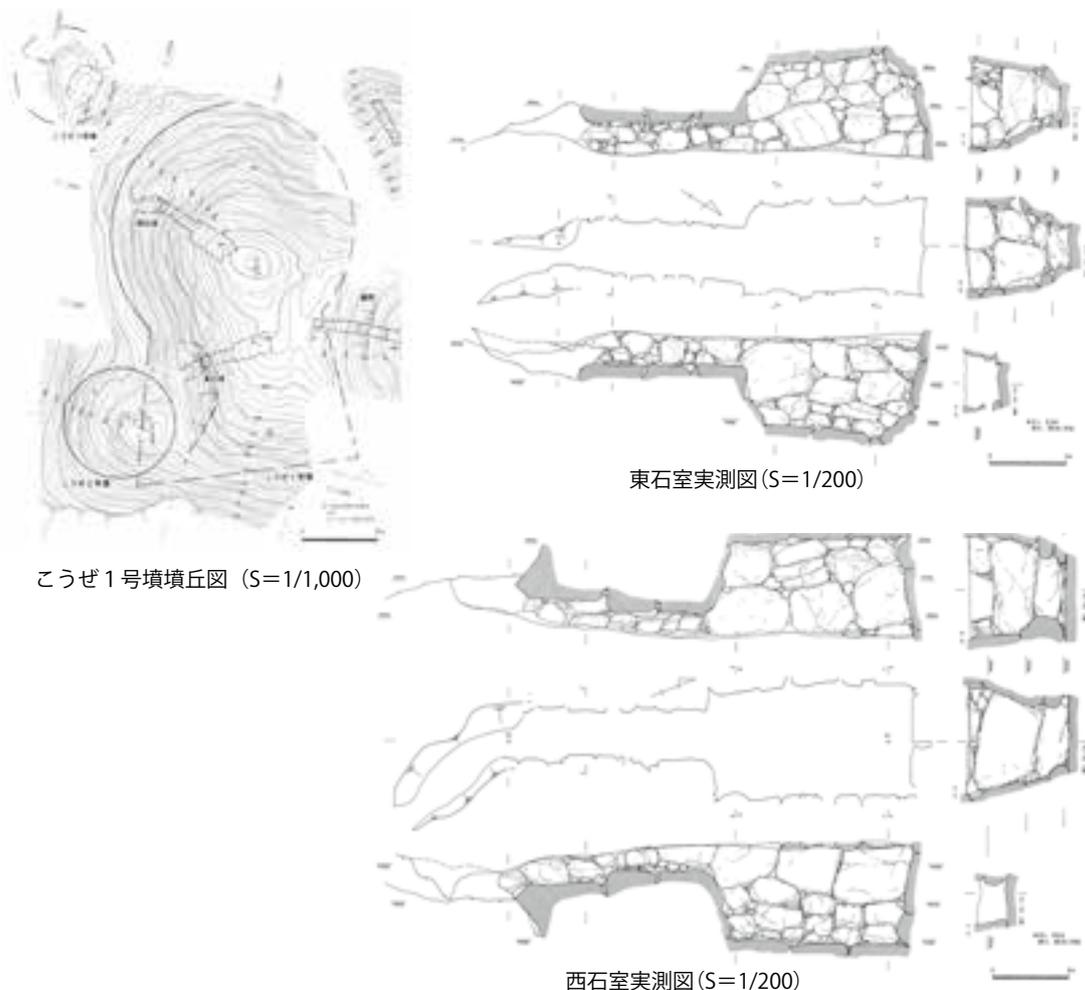


図7 こうぜ1号墳 (S = 1/200、福辻 2010 から転載)

(2) 構造からみた1号墳と3号墳の横穴式石室の前後関係

1号墳と3号墳の石室を比較すると、共通するのは、袖部の立石、奥壁や側壁の上半部を内傾に積むことである。異なる点としては、①1号墳が奥壁や玄室側壁を3段積みするのが基本であるのに対し、3号墳は4～5段積みであること、②羨道側壁が1号墳は基底部に大型の石材を用いる傾向がみられるのに対し、3号墳は同大の石を2～3段に積むこと、③袖が1号墳は両袖なのに対し、3号墳は両側に立石があるにもかかわらず、平面形が右片袖のようにになっていることの3点があげられる。当該期の石室の大まかな傾向として、玄室石材の大型化＝段数の減少、袖部の石材の大型化、羨道側壁の石材の大型化などが指摘されている(白石1962、太田2011、宮元2005など)。①と②の要素をみれば1号墳の方が石材の大型化進んでおり1号墳に新しい要素がみられるが、下位の階層ほど石材の大型化が鈍い傾向があるとの指摘もあり(太田2011)、規模が大きく違う古墳なので、それらのみで前後関係を決めるのは危険である。次に③の袖部平面形の違いが時期差を表すものかについて、赤坂天王山古墳群の西約1.8km離れた場所に位置するこうぜ1号墳(福辻2010)の例をあげて検討しておきたい。こうぜ1号墳は、全長約50mの前方後円墳で、後円部及び前方部に横穴式石室をもつ(図7)。後円部(西側)石室は全長10.9m以上、玄室は長さ5.4m、幅2.6～2.4mで、前方部(東側)石室は、全長9.9m、玄室は長さ4.7m、幅2.5～2.3mである。後円部の石室は、赤坂天王山1号墳より一回り小さいものの大型石室の部類になる。両石室の最大の特徴は、両袖式の形態をとりながらも、左右の袖幅が異なり後円部は左片袖、前方部は右片袖幅が広く偏った袖部で、赤坂天王山3号墳の特徴と同じである。こうぜ1号墳と赤坂天王山1号墳の前後関係を考えた場合、奥壁や玄室側壁の石材の大型化の傾向はあるものの羨道側壁の石材の大型化の傾向がみられないのは、3号墳と比較した②の点と同じく古い要素をもつ⁽⁵⁾。また、こうぜ1号墳が前方後円墳であるという点を加味すると、赤坂天王山1号墳より古く、その直前に築かれた古墳であると筆者は考えている(丹羽2010)。そうすると、3号墳と共通する偏った袖を持つ両袖式と左右均等な幅をもつ両袖式の前後関係を考えた場合、さらなる類例の検討が必要なものの、偏った袖を持つ両袖式の方が古い要素であるといえる。

ここでは、赤坂天王山1号墳と3号墳の石室の比較から、3号墳には1号墳よりも古い要素が多く、3号墳が先行する可能性があるとは指摘できる。また同時に新古を表す差も小さく非常に近接した時期の古墳だといえる。1号墳は6世紀末頃、3号墳は6世紀後半もしくは末頃でも1号墳より先に築造されたものと考えたい。

4. まとめ

以上のように墳丘測量図からみた古墳の立地の特徴、横穴式石室の比較検討から1号墳と他の古墳との前後関係を見てきた。それらをもとにまず古墳群の形成時期を他の古墳も含めて考えてみる。出土遺物が明らかでない中、古墳



図8 採集された須恵器杯蓋
(S = 1/4、橋本2018から転載)

群の築造時期を知るかすかな手がかりとして、測量調査時の表採資料がある（図8）。TK 10 型式期だと考えられる坏蓋が採集されている（橋本 2018）。現在のところ確実に 6 世紀中頃までさかのぼる古墳は不明だが、古墳群の築造開始期の参考にはなる。横穴式石室の検討からは、1 号墳は 6 世紀末頃、3 号墳は 6 世紀後半もしくは末頃と考えられ、測量図からも 3 号墳が 1 号墳に先行すると考え、2 号墳も同様に考えた。斜面に築かれる小規模墳という特徴をもつ C グループとした 6～12 号墳については、近隣ではカタハラ古墳群（橋本 2000）、粟原カタソバ古墳群（関川ほか 2003）、少し離れているが高家古墳群（関川 1995）などの例が参考となる。これらは 6 世紀後半～末頃から築造が開始されるが築造のピークは 7 世紀前半代だと考えられる。C グループの築造時期についてはこれを参考にして、1 号墳より後の築造と想定する。このことは、7 号墳の全長 4 m ほどの小規模な両袖式石室という石室の形態からも矛盾しないだろう。13～15 号墳に関しては現状では判断する要素がない。

以上のことから、赤坂天王山古墳群は、6 世紀中頃から形成が始まり、2・3 号墳（6 世紀後半～末）→1 号墳（6 世紀末）→6～12 号墳（6 世紀末～7 世紀前半）の築造順を想定する。こういった古墳群の形成時期自体については古墳時代後～終末期にかけて築かれる古墳群としてはよくみられるものであり特に珍しいものではない。しかしながら、1 号墳とその他の築造順を考えた場合、最大規模である 1 号墳が、直前に築かれた古墳に近接して（破壊して）築いていることには違和感がある⁽⁶⁾。古墳群の盟主たる被葬者の墓域が古墳群の形成時に計画されていないことになり、また、前方後円墳築造以後の大王墓に匹敵する規模の古墳に近接して多くの古墳が築かれていることも他の大型墳の例⁽⁷⁾と比べても特異な点である。A と B グループとの関係、A グループ内の 1・2 号墳との関係は、類例からは理解しにくいものである。

古墳群の形成過程や立地を考えた場合、古墳群の在り方としては異質な部分も多く、盟主墳と従属墳という単純な関係では説明しえないことが指摘できたと思う。特に古墳群の中に築かれた大型墳である 1 号墳の特異性は、安易に考えるのは慎むべきものの、被葬者候補である崇峻天皇の異例な埋葬過程と重ね合わせたくなるものであり、赤坂天王山古墳群と 1 号墳との関係の解明は、1 号墳の被葬者の比定にもつながる重要な問題である。古墳群の構成原理を様々な角度から検討する必要がある。

以上、古墳群の観察や墳丘測量図から気付いた点を挙げてきた。しかしながら、測量図からだけでは解決できない課題も多い。例えば、1 号墳と他の関係を考える上で重要とした平坦面の造成時期である。それぞれ 3 号墳と 2 号墳との前後関係は測量図から推測できるが、平坦面の造成が 1 号墳築造後におこなわれた可能性は完全には否定できない⁽⁸⁾。この点については発掘調査による層位の検討などにより解決できるもので、重要な検討課題と指摘しておく。

墳丘測量図をもとに推論を重ね、想像をたくましくしすぎた感はあるが、赤坂天王山 1 号墳そのものの解明や赤坂天王山古墳群との関係を考えることは、前方後円墳築造停止後の古墳の在り方、大型墳の被葬者と古墳群の被葬者集団との在り方など、古墳時代後・終末期の研究に大きく寄与することは疑いない。本稿が来たるべき本格的な調査をする際の一助になれば幸いである。

補記

赤坂天王山古墳群は、在学中に初めて遺跡見学をした場所で、1号墳の石室を初めてみた衝撃が、その後の私の研究テーマを決定づけた。退職記念論集に、赤坂天王山古墳群に関わる一文を掲載すること、今後の業務として当古墳群の解明、保存活用に携わることによって少しでも学恩に報いることができればと思う。

また、本稿を成すにあたっては、職場の上司である橋本輝彦氏の調査報告による部分が大きく、そのトレースに過ぎない点も多い。報告書作成段階において、公表前の墳丘測量図などの資料を先行して熟視させていただいたり、検討段階での議論にも加えていただいた。こうぜ1号墳については、担当である福辻淳氏とも多く議論した。その機会をいただいた橋本氏、福辻氏、また職場同僚に、末筆ではありますが、ここに感謝の意を表します。

註

- (1) 『延喜式』には「倉梯岡陵。倉梯宮に御宇し崇峻天皇。大和国十市郡に在り。陵地并に陵戸無し。」と記されているように平安時代にはすでに伝承がなく、崇峻天皇陵の治定は容易でなかったようである。赤坂天王山1号墳が崇峻天皇陵と考えた人も多く、実際に元禄年間では崇峻天皇とされていた時期がある（橋本2018など）。また、明治初期には現崇峻陵を見下ろす丘陵上にある雀塚古墳（現在は陵付属地）が治定されていたこともある（石田2003）。現在の崇峻陵である「倉梯岡上陵」や雀塚古墳とも大王墓には相応しいものでなく、古墳であることさえ疑わしい。
- (2) 特に斜面上に築かれる小規模墳は現況測量だけでは見出し難いものもあるため、実際には15基より多い古墳があった可能性がある。
- (3) 羨門の天井石に架かる側壁の石積みは大型のものではないが、墳丘と開口部との関係で調整された付加羨道（土生田1994）なので、編年を考える要素でないと筆者は考えている。
- (4) 畿内の横穴式石室編年の代表的なものに太田宏明のものがある（太田2011）。太田は属性分析しその属性の組み合わせにより類型化して編年案を提示しているが、赤坂天王山1号墳を6群、牧野古墳を7群とし、赤坂天王山1号墳の方が袖部や羨道側壁に古い要素があるとしている。1号墳の羨道は埋まっているため判断は難しいが、筆者は羨道側壁にはさほど差異はなく、また同じ設計のもとに造られた2つの石室を別類型とすることは賛成せず、ほぼ同時期の築造とみる。もっとも太田自身も各群の存続期間の重複も想定していることから、両古墳が同時期であること自体は否定していない。
- (5) 石材の大型化の傾向は本文でも述べているとおり、石室のランクによりずれがあるので単純に用いることは危険だが、羨道側壁の段数の比較は、玄室側壁の段数を比較よりも新古を決めやすい要素だといわれており（太田2011）、筆者も同様に考えている。
- (6) 当該期の古墳群は、最大規模をもつ盟主墳の築造を契機に同時期の古墳やそれ以降の古墳が築かれることが多い。市内では粟原カタソバ古墳群、こうぜ古墳群、高家古墳群などがあげられる。また、既存の古墳を破壊し大型墳を築いた例として明日香村石舞台古墳があるが（奈良県1937）、6世紀末頃の築造とされる古墳群を完全に削平して築いたと考えられ、近接する古墳が存在している本例とは少し異なる。
- (7) 同規模の古墳として牧野古墳、時期は新しくなるものの明日香村石舞台古墳、桜井市段ノ塚古墳、同ムネサカ1号墳などがあげられるがいずれも単独墳、もしくは近くに古墳があったとしても墳裾を接することはなく、大型墳より後に築造されたものが多い。
- (8) 赤坂天王山1号墳が後世に改変された可能性があるのは、元禄期の一時期に崇峻天皇陵とされていた時である。墳丘に垣がめぐらされた絵図も残されている（林鷲峯1618－1680）。仮に平坦面等がその時

の整備であれば前後関係も再考する必要があるだろう。

参考文献

- 石田茂輔 2003 「崇峻天皇」『歴代天皇・年号事典』米田雄介編 吉川弘文館
- 梅原末治 1938 「第二大和赤阪天王山古墳」『近畿地方古墳墓の調査3』日本古文化研究所
- 太田宏明 2011 「第二章 畿内型石室の基礎的考察」『畿内政権と横穴式石室』学生社
- 河上邦彦編 1987 『史跡 牧野古墳』広陵町文化財調査報告第1冊 広陵町教育委員会
- 小島俊次 1958 『古墳—桜井市古墳綜覧—』桜井市文化叢書第一冊 桜井市役所
- 佐藤小吉 1914 「赤阪ノ古墳」『奈良縣史蹟勝地調査会報告書第2回』奈良縣
- 白石太一郎 1962 「畿内における横穴式石室の変遷」『古代学研究』第30号 古代学協会
- 関川尚功 1995 「高家古墳群」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）1994年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 関川尚功ほか 2003 『粟原カタソバ遺跡群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第65冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 田村吉永 1935 「大和に於ける方形墳」『大和志』第2巻第11號 大和國史會
- 丹羽恵二編 2010 『桜井の横穴式石室を訪ねて』（財）桜井市文化財協会
- 橋本輝彦 2018 『赤坂天王山古墳群の研究—測量調査報告—』調査研究報告 第1冊（財）桜井市文化財協会
- 橋本輝彦 2000 『カタハラ古墳群発掘調査報告書—いわゆる窮窿状天井を持つ横穴式石室と7世紀の群集墓の調査』（財）桜井市文化財協会
- 土生田純之 1994 「大和における大型横穴式石室の構築工程について—「付加 羨道」の検討」『専修人文論集』55号 専修大学出版局
- 林 鶯峯（1618～1680）『御陵所考』
- 福辻 淳 2010 「こうぜ古墳群第1次調査」『桜井市内埋蔵文化財 2006年度 1発掘調査報告書』（財）桜井市文化財協会
- 奈良県 1937 『高市郡高市村島庄石舞臺古墳調査』奈良縣史蹟名勝天然記念物調査報告 14 奈良縣
- 宮元香織 2005 「大和における横穴式石室について—大和盆地における古墳時代後期の動向—」『奈良女子大学 21世紀COEプログラム古代日本と東アジア世界』Vol. 6